

# 海外放浪重ねた詩人

## 文人の 武蔵野

詩人の金子光晴（1895～1975年）は、吉祥寺に終の棲家を構えた武蔵野の文人です。しかし、金子光晴を特定の場所と結びつけてとりあげることは躊躇いを憶えます。

### 金子光晴 ①



吉祥寺で長く暮らし、詩人の金子光晴

住んでいました。ですが、帰国の予定を立てずにアジアやヨーロッパへの海外放浪を重ね、戸籍の移動も多い詩人でした。長期間にわたり家をあけることもしばしばでしたので、40年近く武蔵野に定住し

ていたと言いつつ、切ることにはできません。

また、これまでとりあげてきた作家のように、わかりやすく「武蔵野」を描いた武蔵野文学と言えぬ代表作を残しているわけはありません。「文人（金子光晴）の武蔵野」という項目を立てるのは容易なことではないのです。

実際、武蔵野に住み始めた38年前後に発表した詩集「鮫」（37年）や散文詩の性格も備える「マレー・蘭印紀行」（40年）は、その後の金子の名声に繋がる名作です。今こそ精読してほしい作品ばかりですが、そのタイトルからも推測できるように、そもそも日本を舞台にしたものはありません。主に当時の南洋

植民地（東南アジア）を舞台にした作品群であり、武蔵野とは直接的な関係を持ちません。

「鮫」は、反戦抵抗詩の金字塔と言われていますが、戦争反対と書かれています。戦争や植民地を求めるといふ根源的な問いがそこにはあります。日本中の人たちが軍国主義と植民地主義に傾いていたときのことです。

240行の長編詩「鮫」においては、よく読むと、近代科学と「軍艦」が奴隷化と略奪行為を暴力的に推進する帝国の観智と植民地システムのしたたかさ、やっかいさが構造的に理解できると描かれています。

戦後になってから多くの旅人のバイブルとなり愛読されてきた「マレー・蘭印紀行」でも、抵抗の主体の表象を通して帝国日本が批判されています。

金子は、自らの詩に記しているように「反対こそ人生」が信条であり「むこうむきになつておとせいでした。それでは、金子にとつての武蔵野とはなんだったのでしょうか？

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

